

一九二〇年代日本左翼運動における「知」の転換

立本 紘之

——ドイツからロシアへ——

はじめに

マルクス主義運動及びその派生運動は、「空想から科学へ」の移行を担保する革命運動理論の存在と、それに対する運動参加者の理論的習熟が強く求められるという所に特徴がある。この特質は、理論的修練に長けた学生・知識人層の運動への没入を促す一方で、そういったものと親和性の低い労働者・農民を中心とする大衆層から敬遠されるという結果を生み、日本の特に戦前期の左翼運動は後者を運動の主なターゲットとしながらも、運動の量的中軸が前者によって占められるという状態が生まれることとなった。

運動の側では大衆層を運動に取り込むため、頻りに大衆化を高唱し、アピールを重ねて行く。昭和初期の左翼運動、とりわけ一九二八（昭和三）年以降ほぼ完全に運動中枢が地下に潜り、一般大衆の眼に触れない形になった日本共産党系の運動においては、この大衆化の試みを

担った大きな運動勢力が存在した。プロレタリア文学・演劇など大衆の眼に触れる媒体を保持したプロレタリア文化運動がそれである。

一例として二八年結成の全日本無産者芸術聯盟（ナップ）の機関誌『戦旗』は文芸理論やプロレタリア小説に加え、海外の左翼運動の紹介や、現実社会の諸問題の記事など、多彩な掲載物で彩られ大衆を左翼運動へと誘う橋渡しを行う入門書的作用を果たしていた。この傾向は、一九三一（昭和六）年に成立したナップの後継発展組織である日本プロレタリア文化聯盟（コップ）及びその傘下各団体の機関誌にも受け継がれていく。この運動の中心に位置していたのがプロレタリア文学運動で、中野重治・蔵原惟人らを始めとしたプロレタリア文学運動者は、文芸運動理論展開の中心となっていた。

プロレタリア文化運動はこのように、共産党系左翼運動の合法面における顔であり、大衆に左翼運動を「魅せる」存在であった。ということは、同運動内に表れた言説及びその背景を分析することで、昭和初期の共産党系左翼運動の傾向・特質及び変遷をトレース出来るので

はないかという観点から、筆者は研究を進めてきた。⁽¹⁾

この前提を踏まえて、本論文では共産党系左翼運動の合法面に表れた革命運動理論の観点から、考察を進めたい。ここで合法面と規定したのは、当該期左翼運動における「権威」の問題を筆者が研究の主軸としているからである。共産党運動は、党とその理論が「正しい」理論として受け入れられ、党に従うことを疑わない人々が常に一定数確保されなければ、党運動として存続し得ないものである。そうした人々の数を増やすため、宣伝活動を行う舞台こそが運動の合法面であり、戦前期左翼出版活動はその大きな一翼を担っていた。

こうした運動の宣伝物に表れる言説などから、党運動が権威を勝ち得て行く過程を検証すること、それこそが日本の共産党系左翼運動の特質を紐解くために必要不可欠ではないかという観点から筆者は本論文を含めた研究を進めており、本論文はその一端となる。

革命運動理論を取り上げる上で問題となるのが、いかなる時期に「ソヴィエト・ロシア」の理論が主流のものとなったのか、ということである。マルクス主義の本格的成立以後、革命運動理論の中心となったのは長らくドイツであり、日本もご多分にもれずドイツの革命理論が参照され続けてきた。その上高等教育の必修言語であるドイツ語と、それに伴うドイツ学の延長線上に位置する思想としてマルクス主義を中心とするドイツ革命運動理論が教養の一部として日本のインテリ層に浸透してきた⁽²⁾という側面もある。

しかしながら、一九一七（大正六）年のロシア革命によって、マルクス主義を発展させ、現実に革命を実現した思想としてのレーニン主義（ロシア型社会主義）が革命理論の最先端として登場した。「空想」でなくなったこの革命理論はやがて日本にも到来していくことに

なるのだが、ロシア革命直後すぐにレーニン主義が革命運動理論の中心に躍り出たというわけではない。レーニン主義が日本で支配的な指導理論となるまでにはタイムラグがあり、それは日本の運動状況における変化、及びその変化の過程とリンクした世界的な潮流とも複雑に絡み合い、日本におけるレーニン主義受容の特徴的構図を作り出すこととなった。

そこで筆者はロシア革命以後、一九二〇年代を中心に日本における運動理論の受容の過程を、その過程で登場した二人の理論伝達者、福本和夫と蔵原惟人の「連続性」という観点も含め考察を試みたい。福本に関しても蔵原に関しても、その理論及び背景に関しては多くの関係者の回想・証言やそれを元にした研究がなされている。しかし日本の左翼運動における理論受容・権威構築過程における、この二人の連続性に関して論じたものは管見の限り存在しない。

それも無理はないことで、そもそもこの二人は運動の領域を異にし（福本は一九二六（大正十五）年の日本共産党再建に大きな影響を与えた理論指導者であり、蔵原は一九二八年以後のプロレタリア文化運動の理論的中心となった指導者）、互いが直接接点を持つことも、論争と呼べるものを展開したわけでもないからである。⁽³⁾

だが、革命運動理論の日本への伝播という観点から見れば、この二人の存在とその連続性を成立させた革命理論受容の流れが、後年の日本の共産党系左翼運動全体を通して大きな影響を与える意義深いものであったと言える。以下、このような成果を齎した一九二〇年代の日本における革命運動理論受容の流れを見ていくことにする。

一・一九二〇年代初頭までの日本における革命理論紹介

と思想状況

一九一七年のロシア革命とその後の内戦・干渉戦争を経て、一九二〇（大正九）年頃には、ソヴィエト・ロシアという国及び共産主義体制の固定化と中長期的な存続がほぼ確定した。それと共に革命ロシアの事情やその誕生に寄与した共産主義の思想・理論（ロシア型社会主義思想）がドイツを中心とした欧州・アメリカなどを經由する形で世界的に伝播していった。

運動を体系化する拠り所の成立⁽⁵⁾とそれに基づく運動の組織化の動きは日本でも二〇年代初頭から徐々に顕在化し、山川均・堺利彦ら明治期からの社会主義者と、赤松克麿・浅沼稻次郎らに代表される帝大新人会（一九一八（大正七）年創立）や早稲田大学建設者同盟（一九一九（大正八）年創立）など学生社会思想研究団体出身の若い世代の左傾知識人らによる各種理論・時評系雑誌（市川正一・青野季吉らの『無産階級』、山川均らの『前衛』、上記両学生団体の機関誌等々）による活動から、社会主義者の糾合組織として誕生した一九二〇年の日本社会主義同盟（翌年禁止）を経て、一九二二（大正十一）年の第一次日本共産党結成、震災後の反動を受けた一九二四（大正十三）年の共産党解党及び、翌年の普選法成立を受けた合法無産政党運動へと繋がる形で、運動の組織的展開が進められていく。

また、運動主体である労働者・農民を取り巻く客観的情勢の変化もこの時期大きく進む。一九一九年ヴェルサイユ条約によって国際連盟に国際労働機関（ILO）が誕生、日本もそれに加盟したことで労働

者その権利を行使することを承認するという世界基準が日本にも適応されたことになった。

このことは争議行為に正当性を与えることとなり、ほぼ同時期に始まる大戦後の戦後不況とも相俟って各地で労働争議が頻発した。二〇年から日本でも開催されるようになったメーデーや、二一年に起こった労働団体友愛会の日本労働総同盟への改組とその戦闘的スタンスの強化は労働者の意識を向上させ、社会運動により一層拍車をかけていく。同時期の農村でも小作争議や、都市同様に各種生活費の値下げ運動も頻発するようになり、日本はこれまでに類を見ない社会運動の時代を迎えていった。

以上のような状況下で、当初は状況把握が不正確だった革命ロシアとその運動理論に関しても、少しずつ日本に紹介され始めてきた。ロシア革命以後、最初に革命ロシア・ボルシェビズムの体系的紹介をしたのは、山川均の個人研究雑誌『社会主義研究』である。

一九一九年九月の同誌に掲載された堺利彦の「マルクス主義の分化⁽⁷⁾」という文章では、マルクス主義が分化して「レヴィジヨニズム」「サンチカリズム」「ギルド・ソーシヤリズム」となったが、今ここに「ポリシエイズム」という新分化が加わったと前提した上で、それぞれが欧州各国独自の社会主義形態、すなわち「ポリシエイズム」はロシア独自の社会主義分化形態であると述べられている。

同誌の主催者山川均もまた、ボルシェビズムをマルクス主義の分化として捉えつつ、ロシア紹介を積極的に行った。同誌二巻六月号（一九二〇）の「ソヴィエト政治の特質と其批判」で山川は、

レニンの多くの小論文のうちには、必ずしも社会主義の学説の上に、独創の天地を拓いた新たなものは見当たらない。レニンの驚

くべき力は、新たらしいものを掘り出したことではなくて既に掘り出されたものに徹底して居ることである。⁽⁸⁾

と述べ、続けてドイツ革命の指導者は「自己の力」を信じ革命の設計をなしたため、運動には限界があったが、レーニンは「民衆の創造力」と、そこから生まれる「無限の行動」を信じたところに革命の成否を分ける違いがあったと結論づけている。

またレーニンに対する有力な反対者として、『資本論解説』の著者として当時の日本でも知られていた理論家カウツキーの名を挙げ、「真に社会進法の法則を握っているものはレーニンであるか、カウツキーであるかは、言葉をかえていえば、露国の革命が勝つかドイツの革命が勝つかである」と述べている。⁽⁹⁾

共に「正統マルクス主義」の側に立つと山川が位置付けたレーニンとカウツキーの論争（カウツキー『プロレタリアート独裁』及びレーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』）を念頭においてこの文章は書かれたと思われる。革命理論の主導という問題に対し、心情的にはソヴィエト・ロシアに寄りながらも革命状況が不鮮明な段階で明確な回答を出せない日本の社会主義者の苦心も窺える。

同誌三卷（一九二二）九月号の山川均「科学の社会主義と実行の社会主義」⁽¹⁰⁾では、前述の堺の時期より深くなったロシア革命についての認識を裏付けるかのように山川は、「ボリセキズム」を「実際の上の社会主義」（空想↓科学の先にあるものとしての）と定義する。その上で、「ボリセキズム」は従来の社会主義と異なるものではないが、相違があるとすれば「ソヴィエト」という制度であると述べ、この制度は「科学の社会主義」の持っていた理論を始めて制度化したものとして非常に意味のあるものだと説いている。

この時期の山川のスタンスとしては、レーニンをマルクス学説の正統後継者として位置付ける一方で、彼が主導した革命運動をマルクス学説の応用実践の産物としてその特色を伝え広めることを意識的に行うということに重きを置いていたと言えるであろう。⁽¹¹⁾

一九二〇年前後のこの時期からソヴィエト・ロシアの制度紹介が本格化する。『社会主義研究』誌と並びその先駆けとなったのは山川均ら「水曜会」メンバーの手によって刊行された雑誌『前衛』⁽¹²⁾である。同誌の二二年一月号・二月号に掲載された山川「露国は共産党の独裁か？」⁽¹³⁾では、ソ連における細胞組織の紹介や、宣伝拠点と呼ばれる公開の読書室といった施設の紹介、委員会組織内における党フラクシヨンによる指導、さらに細胞決議への服従など「前衛党原則」の一端に初めて言及されている。

そもそも一般に前衛党原則と呼ばれるものは、一九二〇年のコミンテルン第二回大会で採択された、コミンテルン支部である各国共産党がコミンテルン加盟の要件として満たすべき二十一項目の原則が元になっている。その項目は、共産主義政党と社会主義政党の明確な峻別、民主集中制を基礎とした強固な党組織、宣伝煽動部局の党中央直接管理などを含むものである。そして後に、加盟要件には含まれないが、コミンテルン傘下の前衛党の守るべき規範として、党内分派の禁止、党内討議中の要件の党外への持ち出し禁止などの要件がコミンテルンの活動を通じて新たに定義され、これらの規範も含めて前衛党原則として、前衛党構成員、その関係団体の人間が守るべき物として位置付けられていくことになる。

山川の上記の文章はプロレタリア独裁という権力構造の存在に対するアナキストからの批判に対して、事実として共産党が民衆を指導し、

革命政権を維持しているという状況説明と、指導者たる前衛が厳格なる規律で結合されていることで、権力否定の立場に立つアナキストに對し、プロレタリア独裁の健全性をアピールするという意味も多分に含まれている。⁽¹⁶⁾

第一次日本共産党結成はこうした状況下で起こった。この時期のソ連及びボルシェビズムに関しては、革命直後の状況が全く不明の段階から、少しずつボルシェビズムやソヴィエトを始めとする思想・制度が伝えられ始め、この新しい社会主義がどういふもので、どういふ効用を人々に、そして日本の運動に齎すかを出来る限り客観的に知らしめる運動理論紹介の動きの中で、少しずつ人々の間にソ連やボルシェビズムが知られ始めた段階であると言えるだろう。

当然のことながら、ボルシェビズムは、絶対の理論ではなく、革命を達成した国の主導理論という敬意こそあれ、あくまでソヴィエト・ロシアで分化したマルクス主義の一つの型という認識が主であった。要はサンジカリズム・ギルド社会主義などと同等な、社会改良のためのオルタナティブな選択肢の一つに過ぎなかったのである。

そうした状況もあって、この段階では未だ運動における組織論を、こうして紹介されたソ連の現実などからフィードバックを受けて日本で確立するような段階には至っていない。このことは山川の著名な論文「無産階級運動の方向転換」(『前衛』二二年八月号)に組織論関係の記述が無いことから明らかである。⁽¹⁷⁾

以上のような流れの中で、左翼運動雑誌は着実にソヴィエト・ロシアの現状を日本に紹介する役割を果たしていく。だが、この時期の刊行物では革命運動理論の紹介の段階にまで立ち入ってはいない。あくまで革命直後の干渉戦争や、その後の飢饉、ネップ(新経済政策)へ

の移行などの紹介といった客観的事実の羅列や、レーニンを中心とした革命指導者の人物伝的・偉人的紹介など読者層の心情的に訴えかけるものを中心に留まっていた。このようなソヴィエト・ロシア紹介中心の左翼論壇がある種決定的に変化するには、二四年末の福本和夫の登場を待たなければならぬ。

二・福本和夫とその理論——ロシア理論による権威の担保

一九二四年以降の日本の左翼運動を考える上で、福本和夫の存在を避けて通ることは出来ないであろう。彼の理論が影響力を持つようになった状況というのは、社会運動における権威の形成過程を考察する上で非常に重要な要素となるものである。以下しばらく福本の理論とその周辺について見ていくことにする。

福本が「経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず」を雑誌『マルクス主義』に寄稿し、左翼論壇に登場したのは一九二四年一二月である。福本は後年同誌を寄稿先に選んだ理由として「翻訳紹介ばかり」で無産政党中間派系の雑誌『社会思想』誌に比べて見劣りはするが、「たしかにマルクス主義を標榜している」からだと述べている。⁽¹⁸⁾

『マルクス主義』は、第一次共産党の理論機関誌であった『赤旗』(後の共産党機関紙『赤旗』とは別の雑誌)、その解題誌『階級戦』の事実上の後継誌であり、当時の共産主義理論雑誌としては最も権威のあるものであった。同誌の政治的スタンスとしては無産政党左派の労働農民党寄りであったが、『社会思想』誌上でもその発刊を祝される程、ある種敬意の対象となっていた雑誌である。『赤旗』が、元々山

川均の研究雑誌『社会主義研究』と青野季吉らの研究誌『無産階級』の合同誌という、いわば社会主義研究誌の伝統の系譜に位置するといふ所から来る権威も強く作用していた部分もある。マルクス主義の正統の立場を明示したこの権威ある雑誌に突如現れた新人福本は、同誌上で次々と河上肇や櫛田民蔵といった当時のマルクス主義社会学者を批判する論文を発表していった。

一九二五（大正十四）年六月号の「欧州に於ける無産者階級政党組織問題の歴史的發展（三）」（北條一雄名義）で福本は、前々号から展開して来た欧州の社会主義運動史を語る文脈中において、初めて本格的にレーニンの党組織論に言及した。そこで福本は、「階級意識を意識したる無産者の組織と不可分的に結合したるジャコビン党」組織のため「結合する前に先づ、きれいに、分離」²⁰することの重要性に初めて触れている。そして、

ポリセヴィズムは、もしも、メンセヴィキー即ち機會主義者、修正主義者、社会的偏狹愛国主義者を征服し且つ彼等を無産者前衛の政党（共産党）から、冷酷に放逐することを、予め、一九〇三年—一九一七年に学ばなかつたならば、一九一七年—一九一九年に於て、有産者を征服しえなかつたのであらう。²¹

と述べ、ロシア革命の勝因が革命の前段階における分離による組織純化にあることを強調した。さらに、

ロシアでは革命の当初、十五ヶ年間の経験、鉄の如き規律ある組織の革命党が存在した。独逸では、革命の当初まで、革命的分子は、機會主義的大衆党のなかの「意見の相違」にすぎなかつた。

—真に革命的なる政党は、かの十一月転覆（Novembersturz）一九一八年十一月）以後、漸くはじめて組織せられた。しかしそ

れは、かの独逸革命の気運を真に無産者の革命にまで導き進めようには、あまりに遅かつた。²²

と述べ、ドイツ革命では前段階の分離による組織純化がなされなかつたことが敗因という点を強調した。このように、福本はロシア革命とドイツ革命を例に、「組織の純化」という、ある種わかりやすい革命の成否を分かつ要因を提示した。日本の社会主義運動に、「なにをなすべきか」を明確に提示したところ福本の画期性であろう。

加えて、二五年五月、労働組合運動において日本労働総同盟から、渡辺政之輔らの主導で左派が分裂、日本労働組合評議会を結成するという事態が起こる。この直後に福本は分離・結合について語り始めている。言うなれば、直前に起こつた分離の事実が、福本の正しさを後押しするような事態が起こつていたのである。²³

さらに翌一九二六年の無産政党結成に関しても、同年初頭に成立した労働農民党が当初の左派排除から、「門戸開放」を経て一二月に右派・中間派独立と言う形で、社会民衆党・日本労働党・労働農民党の三党鼎立という状態になっていった。これも分離の顕在化であり、客観情勢の変化が福本理論に適合した一例だと社会運動に同調的な人間には見えたであらう。²⁴

福本の「分離・結合」論を彼自身の言葉を軸にして本格的に述べた文章が『マルクス主義』二五年一〇月号の「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか我々はいまそのいかなる過程を過程しつゝあるか」（北條一雄名義）である。この文章では、「精神的闘争」の段階から「政治的、戦術的闘争」の段階への移行の必要性が語られた後、

我々は、上来研究し来たつた如し、今や、始めて、結合—全国的—大政党樹立の必然を当面してゐる。この形勢が二段の決定を導く。

第一に―それにも拘らず、否、それだから、我々は先づマルクス主義的要素を「分離」し、結晶しなければならぬ。

第二に―この原則を戦ひとるがための闘争は当分理論的闘争の範囲に制限せられざるをえぬであらう。⁽²⁵⁾

と述べられている。さらに続く文章で福本は、こうした流れの例として、社会主義同盟から一大無産党、総同盟分裂から評議会成立、の流れに触れた後、来るべき結合のため、『マルクス主義』誌上の理論闘争を通しての「機会主義」からの分離を高唱した。

この論文の重要な点は「分離・結合」について福本の言葉で明確に語られたこと、そして当面の闘争として「理論的闘争」に限定したものが目標とされたことである。前者は、「福本主義」と称される運動理論体系がこの時点で本格的な出発を見せた点で、後者はこれまで運動の主たる働きかけの対象としては懐疑的に見られていた学生・インテリ層に運動中軸への没入の道を開き、文化運動・学生運動に発展と飛躍の機会を与えることとなった点で共に重要である。

福本理論の本格化は、社会主義運動者に求められるものの変容を招く。前掲の「欧州に於ける無産者階級政党組織問題の歴史的發展(三)」では、レーニンの文章を引用する形で、「鉄の如き規律」によって貫かれ、理論的に純化された共産主義者組織による前衛党のみが革命を正しく遂行し得るということが強く強調されていた。また「大衆との結合」も前衛側が意識し、理解するという働きかけに限定されており、正しい前衛による正しい指導を大衆が経験的に会得する理論「伝授」の形が志向されるものとなっていた。⁽²⁶⁾

つまり、福本主義に基づく社会主義運動とは、共産主義運動を志向する者が理論的に自己修練を積み職業革命家を目指し、その過程で社

会・大衆を把握するという運動の形なのである。そしてこの運動スタイルは非常に学生・知識人層、すなわち高等教育経験者層に対して強い親和性を持っていた。

戦前期の高等教育領域において、マルクス主義に到達する経路として「教養主義」、それも修養主義を抱合した教養主義が存在したことは筒井清忠が指摘している。⁽²⁷⁾そのため、教養主義の影響を強く受けた高等教育経験者は、自己修練に対しての親和性が非常に高く、そうした果てにある模範的存在としての職業革命家を目指すため、理論的修練を自らに課すという福本理論が齎したスタイルを自然に受け入れることが出来たと見える。

こうした流れでわかるように、福本主義に基づく運動は、理論の体得が優先されることや、自己修養という要素を持つ点において、高等教育経験者層にとって運動の没入への門戸を開くことに繋がる一方で、実践面においては職業革命家が経営拠点の外から理論を注入し、運動を主導する形を生むことになる。

これまで述べて来た福本の理論、とりわけ分離・結合に関するものはその元を辿れば、福本自身も多数引用しているレーニンの理論、中でも『なにをなすべきか』(一九〇二)に代表される、レーニンを始めとするボルシェビキがロシア社会民主党内で分離結合による革命組織の純化を図った時期の理論に起因するものである。当時ロシア国外を拠点とした非合法活動下の同党で、レーニンが志向したのは自らを職業革命家とし、党を精鋭集団化するための修練であった。

そうした意識を発現させる形で書かれた『なにをなすべきか』が、福本和夫の言葉を借り、次いで日本語訳される形で(ドイツ語教養のある高等教育経験者層はそれ以前から独訳版を読むことが可能であっ

たが）日本の運動に登場したのが、二五年から二六年にかけての運動の大きな変化と言ってもよいだろう。

『マルクス主義』誌上にレーニン「理論的闘争の意義」「大衆の自然成長性と社会民主主義の目的意識性」の二論文の形で同著の部分訳（訳者佐野学）が掲載されたのが二五年八・九月号で、前述の福本の二論文の間に挟まる形になる。そして全訳単行本が刊行されるのが翌二六年のことである（訳者青野季吉）。この時期はレーニンという革命の一大権威に担保された日本の理論家が、客観的情勢に後押しされ、名実共に権威化していった時期としても重要なのである。

当時無産者新聞社で活動し、党再建後運動の中核で活動した浅野晃は、後年の回想で、レーニンの仕事の最初の基礎が「職業革命家」を作ったことであり、それを最大限に示した著書『なにをなすべきか』が読まれるようになると、それ以前の世代と異なり「職業革命家意識」が純粹な若者の間に入り込んでいったと述べている。⁽²⁸⁾ こうした運動者意識の誕生は、職業革命家のあり方を規定するだけでなく、「模範的共産主義者」としてのあり方を追求し、そうしたあり方をとる人物を称揚し、権威化する方向へ社会主義運動を志す人々の意識を向け去っていったという大きな変化の創出を意味する。

成功者・模範者という存在を提示し、それを目指すべく人々を喚起するのも修養主義の一大要素である。福本以前の段階において、レーニラ革命指導者が偉人伝的に取り上げられていたと述べたが、前段階でのこうした下地が、修養の目標である「模範的共産主義者」の権威を裏付け、その理論を援用して得られる効果をさらなるものとし得ていた。運動の模範となる人物像と、その人物が位置する高みへ運動を引き上げようとする意識性の創出という意味においても福本主義の

齎した運動における変化は大きいものであった。

元来明治期から一九二〇年代までの社会主義者は、文献や理論・事件を大衆に伝え、啓蒙する働きかけが主たる活動であった。⁽²⁹⁾ 端的にいえば「西欧ではこんな思想・組織・事件がある。日本でもこれらを役立てて、それにより運動の発展を願う」という呼び掛けを行うような存在だったのである。

例えば山川均は、社会運動を志そうとする青年の手紙に答えるという体の文章で、自身の雑誌が「社会主義の理論方向の紹介に限られて」いる事を前提とした上で、社会主義の理論は、人びとにはつきりとした意識と、戦わねばならぬ明確な理由と勝利の確信を与え、戦いの目的を見出させるものであると述べている。⁽³⁰⁾

山川はここで、理論の重要性（及び実践でそれを活用することの重要性）を述べているが、自身はそれを「紹介」するのみで、理論を身につけた青年が実践で立派に活動することを祈念するに留まっている。⁽³¹⁾ こうしたスタンスが当時の社会主義者の限界であった。言説・行動の強烈さが目立つアナキスト系の人々にしても基本的には蜂起や労働組合組織運動の発展を促す呼びかけ人であり、特定の組織・志向へと強力に牽引する力を發揮するものではなかった。

こうした中で福本は、マルクス・レーニンの原典を元に、「進むべき革命の道」を明確に指し示し、自らの理論が導く方向へ運動を強力に誘導しようという明確な意図を持って論壇に登場した。端的に言えば「後追いの、二流の社会学者の言説がなんになるう。マルクス・レーニンはこう言っている。故に我々もその方向に意識的に進まねばならない、日本でもこう進むべきだ」という強い目的意識性を持った宣伝煽動というスタンスである。言うなれば、これまでの社会主義者

の「見守り」型から「導き」型へと、運動・啓蒙の質が大きく転換していったのが福本理論影響下での大きな変化である。

また、福本がそれまでの社会主義論者と大きく異なる点は、文献の出版を明記したことである。これまでの、そしてこれ以後の左翼関連文献においては、文中に他の著作者の文章を引用する場合、改行などの処置も行わず、引用文の最後の文字の後に唐突にカッコ書きで著者名を挿入する、もしくは、「〜はこう言っていた」と断りを入れた後に引用文を挿入し、唐突に自己の文章に戻る、というようなスタイルが主流であった。この時期の『マルクス主義』誌を見ると、福本のように註や引用箇所への出典の明記がみられるのは翻訳もので元からある註を反映したものや、同誌の直近の論文への反論などの形で引用頁の明記を行った高橋貞樹のみである。³²⁾

前掲した福本の「経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず」が掲載された翌月、二五年一月号の『マルクス主義』誌に掲載された是枝恭二（秋山次郎名義）の論文「歴史的必然の概念に就て」には、著者の断りとして、

所謂学術的博引傍証は、筆者自ら排斥するところであるが、筆者の未熟なる構想と智識の不足とは、学者の言句を乱雑に引用せしむるの余儀なきに至つた。読者へ諒察と、指導とを乞ふ次第である。³³⁾

との一文が冒頭に添えられている。当時の左翼論壇において、「引用」は「学術的」で、例外的状況でなければ慎むべきとの考えが窺える。福本の文章はペダンティックで難渋だと言われるが、彼はその諷刺を生むような当時の意識性に楔を打ち込んだとも言えない³⁴⁾。

読む側の視点を考えてみると、二〇年代末以降の、ロシアを中心と

した外国左翼文献の翻訳氾濫の時代であれば、多くの左翼文献を読んだ結果、引用文だけで見当がつく人間も出てくる状況が想起され得るので、不案内な引用でも問題はないかもしれない。

だが福本が執筆を盛んに行った二〇年代中盤はレーニンの原典の翻訳が始められたばかりで、原典に当たろうにも、言語や洋書の入手という壁が存在していた。レーニンの話ではないが、最初の福本論文を受け取った『マルクス主義』編集部の人房雄が「よんだことのない」文章引用に驚かされ、自身を含めた日本のマルクス主義者の無学さを痛感させられたという後年の回想³⁵⁾は余りにも有名である。運動理論誌の編集者ですらそうなのだから、一般読者に関しては推して知るべきであろう。

また二七、八年以降のマルクス・エンゲルスやレーニン・スターリンなどの『全集』化が進んだ時代とは違い、日本語でそうした作品を読もうとする場合、単行本化されたものを読む³⁶⁾か、『マルクス主義』誌などに掲載された抄訳³⁷⁾を読むのが主たる手段であった時代である。福本以前、外国文献は権威ではあり得るが、ネームバリューが幅を利かせた言わば張り子の虎のようなものであった。

福本が出典となる著作を日本語名あるいはドイツ語名で明記したことで、読者はその本を当たればよくなり、著者名のみ不明瞭な記述より遙かに運動の役に立つものとなった。福本理論を熱烈に支持した学生・知識人層は高等教育課程でドイツ語教養を持ち、学術文献の作法を知り得る人々であり、場合によっては社会科学研究団体に属することで、より容易に出典本にあたるのが可能であった。

それによって、実際にマルクスやレーニンが述べていることを背景にした理論であることがわかれば、福本の理論は観念的な形でなく、

実際にマルクス・レーニンの権威による保証を受けることが出来るようになり、その理論への支持を確固たるものにしていった。

さらに福本は『マルクス主義』二五年一〇月号・十一月号の二回に渡り、「マルクスの体系とレーニンの体系」と題した、マルクス・レーニンの業績整理を行っている⁽³⁸⁾。この仕事の特徴としては「彼等の時代をそれぞれの特質に応じてできるだけ精密に区分」し、「それぞれの区分に対応する彼等の仕事とを吟味」したことにある。ただ出版掲載された年月日のみを記載して事足りりとするのではなく、どの著作がどの時期にあたるのかを明確化することによって、「読者はここで彼等の仕事の一事がいかにかに社会の現実性と結びついてゐるかを十分に考察」することが出来るようになってるのである。こうした仕事を通して、福本はレーニンの業績を整理して伝え、同時にそれに依拠した自身の理論に箔をつけていった。

以上見て来たような出典の明記・研究業績整理というような学術論文的な体裁を整えた文章を執筆することで、福本はそれまでの社会主義論者とは違う形で、知識人層を中心とした教養主義の下地を持つ人々を主として、明確な権威を獲得し得たのである。

三．スターリン文献の到来と権威担保構造の強化

福本の登場・レーニン理論の受容の本格化という変化をこれまで見て来たが、理論面においては、もう一つ大きな変化がこの時期生まれつつあった。主に学生運動などにおいて作用した、石堂清倫曰く「理論上の大転換⁽³⁹⁾」とは、スターリン文献の日本への移入である。

スターリン『レーニン主義の基礎』(一九二四)⁽⁴⁰⁾はまさにこの時期

日本で読まれ始めた。同時期の社会科学研究団体においては研究テキストとして、マルクス・エンゲルスやレーニンの著作だけでなく、福本の著作や、コミンテルン決議の訳文、そして『レーニン主義の基礎』が広く読まれるようになる。言うなれば、レーニンに担保された福本と同時期の理論面において、スターリンによるレーニンの読み方が最大の解釈の権威になっていったのである。

石堂清倫は後年の回想で、『レーニン主義の基礎』に関し、当初「うさんくさい」と感じたが、スターリンは「ボルシェヴィキ党の書記長」で、「非マルクス主義的なものがボルシェヴィキ党の書記長になるわけではない」から、彼の書いたものが、「うさんくさいとかかわからない」というのは、こつちがまちがっているんじゃないだろうか「こつちのいたらないせいだ」と考えるに至ったと述べている⁽⁴¹⁾。

マルクス主義的研究に触れて来た人間として、一見した所で疑問を感じざるを得ないものであっても、著者が「ボルシェヴィキ党の書記長」ということで、そうした疑問は自らの運動者としての未熟さであるという方向に向かってしまうと言う状況が生じているのである。ロシア革命の実行主体であるボルシェヴィキ党、その要職につく人間がまとめたレーニン主義の教科書である『レーニン主義の基礎』はこうして権威の塊として日本の運動者の前に現れることとなった。これもまた模範的共産主義者に対する権威が日本の運動において大きな影響力を持つ状況の到来を現す一例と言えよう。

『レーニン主義の基礎』が広く読まれるようになったもう一つの原因は、日本において同著が入ってきたタイミングと、レーニン文献の訳出の本格化のタイミングがほぼ同じ時期であったということである。福本が出典付きで盛んに引用し、その理論の元となっているレーニン、

その著作を日本語で読める環境が徐々に整ってきたのはいいが、未だ抜訳がメインで、しかも（レーニンに限ったことではないが）当時外国の左翼理論家の著作を日本語で読もうとする場合、前述したように氾濫し始めた左翼運動雑誌の中を徹底して探し回るか、単行本刊行を待つ苦勞を強いられるという現実問題が存在していた。学生社会運動団体であれば独語版・英語版などをテキストとして用いる例も少なくなかったが、レーニンは権威化し始めていながら体系的に学習するには敷居の高い存在でもあった。

このようにどう読んで行くべきか、という悩みを抱えた人々にとつて、『レーニン主義の基礎』というその理論体系が一応はまとめられた形で記された著作があれば、それを読み解きながらレーニンの原典に当たるといふスタイルでレーニン主義を会得することが出来るのである。このようにガイドとして使う場合、石堂が感じたような「うさくささ」も気になりにくくなるであろう。『レーニン主義の基礎』は、そういった意味でも日本においては時を得た文献であり、レーニンを学びつつ、最新のロシアにおける革命理論解釈を会得できる著作として、幅広く読まれていったのである。

前節から続く流れから考えて、福本が自らの権威担保に使用し、文献の訳出が進み、さらには現役の指導者スターリンによる権威の再保証がなされるといふ過程を経た一九二〇年代中盤〜後半の時期こそ、日本でレーニン主義がマルクス主義の分化思想の一つという相対的なものから、「マルクス・レーニン主義」という絶対的な左翼運動主導理論へと大きな飛躍を遂げた時期だと言つてよいだろう。

話をスターリンに戻す。著作が読まれ始め、日本での知名度が上がった「ボルシェビキ党の書記長」スターリンの正統性とその権威に

関しては、この時期一般ジャーナリズム側からのソ連関連の書物によつても強調される傾向があった。

例えば布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』という著作では、布施がスターリンを訪問した際の記述として、「ボリシエウイキーはみなレーニン先生の弟子」というように「レーニズムの開祖」について真摯に語るスターリンの姿が記された上で、トロツキー派との抗争に関して、「レーニン全集の抜萃を引用し」「レーニニズムの解釈の相違について争ふ」様が記されている。そして、

レーニニズムそのものに向つては、何人も真つ向から、叛旗を翻へさうとしない。外様大名の筆頭たり、またトロツキズムの本尊たるトロツキーですら、レーニニズムの根本原則の前には頭をあげ得ぬ。⁴⁴

と記述されている。また、富士辰馬『レーニン線上を歩むソウエート連邦』でも、左右両極へ向かう傾向を制動しながら「頑強にレーニン線の誤らざる延長線を敷設」する工事の主宰者という紹介の仕方、レーニンの後継者スターリンの名が登場している。⁴⁵

断片的に伝わっていたロシア共産党の内訌に際し、レーニン主義の解釈の枠内でトロツキー・ジノヴィエフ・カメネフらと戦う主流派スターリンの姿が垣間見られるこうした記述は、レーニン主義の正しさと、その正統後継者として模範的に振舞つて見せるスターリンの権威を別ベクトルから補強していった。

要するに、二五年から二六年にかけて、日本のロシア革命理論受容の局面において、レーニンの原典と、スターリンによる解釈を踏まえた読み方がほぼ同時に齎されたという状況が生まれており、レーニンの原典は福本和夫による引用・適用が並行的に進んでいた。

つまり、革命の権威レーニンに担保された福本という構造と、現在進行形の権威であるスターリンによってさらなる担保がなされたレーニンという構造が同時に日本において成立していたのである。

この二重の権威が福本理論受容にプラスに働き、さらに福本理論の正しさが現実の運動状況に示されることで、福本の背後にあるレーニン・スターリンの権威をも強固にした。この循環の中で日本の左翼運動におけるソヴィエト・ロシア理論の権威化、ひいては運動全体での権威構造の顕在化が進んでいったと考えることが出来るよう。

四・二七年テーゼと蔵原惟人の登場―ドイツからロシアへ

二六年一二月、山形県五色温泉で秘密裏に行われた日本共産党大会により、福本和夫の手による党綱領と、それに基づく党再建が決議された。そして一九二七（昭和二）年二月に福本を始め日本共産党指導部の大半の幹部は、再建党大会で定められた綱領に関する討議を行うためモスクワに向かった。しかしながら長時間の討議の過程で、福本主義はコミンテルン指導部から徹底した批判を受け、七月一日、コミンテルン日本問題委員会でブハーリン起草による新テーゼが指導方針として与えられることになった。これが二七年テーゼである。

同テーゼ⁽⁴⁶⁾は、日本国家の歴史的段階（半封建制的国家）とそれに伴う革命の性格（ブルジョワ革命の後プロレタリア革命という二段階革命論）や、「君主制廃止」の明記（「天皇制」ではない。大土地所有者・資本家としての君主の要素強調）、従来運動の「大衆と結び付いた階級政党の未成熟」批判、「支那革命擁護」の明記（序列的には日本革命より優先度が高い）、福本的な「統一と結合」理論による大

衆からの乖離と山川のな前衛党清算と組合への運動委譲という二つの傾向の批判、などを主な内容とし、それを踏まえた行動プログラムを示す、初の「公表された」テーゼであった。

テーゼの討議と前後して、福本・徳田ら一部の党中央幹部は党中央の職を解任され、後任人事はコミンテルンの手で進められた。日本共産党がコミンテルン日本支部である以上、人事の裁量への介入は原則上不可避な面があるのだが、コミンテルンが直接人事に介入したのはこの時が最後であることも忘れてはならない。

日本の党がモスクワに直接幹部を送り、討議に関与する行為はこれ以降行われていない。そしてこれ以降の戦前期日本共産党とコミンテルンの関係は、主に上海の極東ビューローを通じて、日本の運動の状況報告を行い、ソ連のクートベ（東方勤労者共産大学）帰りの留学生（三一年テーゼ）や、ドイツの反帝日本人グループなどのルート（三二年テーゼ）⁽⁴⁷⁾経由でテーゼや重要文書の伝達が行われる他、コミンテルン・プロフィンテルンの大会に可能な状況であれば代表団を派遣する、という程度の交流関係に留まっている。

日本の場合、中国やヨーロッパ諸国のようにコミンテルンから直接、幹部や指導員が送り込まれ革命支援が行われたわけではなく、政治教育を若干年受けた程度の日本人留學生の逐次投入を一九二八年から一九三二（昭和七）年までの短期間に数回行った程度である。二七年まで日本に滞在したコミンテルン代表のヤンソンにしても指導力は弱く、福本主義を掣肘することも出来なかった。日本は実務的な面ではコミンテルン側からの拘束力が比較的弱い状況にあったという事実は権威の問題を考える上で大きな前提になり得る。

コミンテルン作成の二七年テーゼを受け入れたことで、日本が完全

にコミンテルンに屈した結果、戦前期の運動は情勢に合わないテーゼ類に振りまわされる結果になったとする見方が大きく、「自主独立」掲げる現在の日本共産党もこの立場を主張している。

しかしながら、二七年テーゼに関していえば、二六年末の再建党綱領の理論的基盤となっていた福本理論がマルクス・レーニンの名によって担保されていたという前提がまずある。福本は欧州留学中に得た文献及び学習でその理論を会得し、日本に持ち込んだ。しかしながら、ロシア革命後、マルクス・レーニンの理論を発展させ、現実に革命を遂行していたのはソヴィエト・ロシアであり、マルクス・レーニン主義の解釈の最先端はロシアに移っていた。

そのロシアに拠点を置き、世界革命の指揮していたコミンテルンの裁定というのは、いかにスターリンとソ連共産党の政治状況（トロツキー一派との対立）に影響を受けていたとしても、マルクス・レーニン主義理論解釈の最先端に外ならない。元々理論をマルクス・レーニンの引用による権威担保に依拠する形で登場した福本理論主導の運動は、権威担保の形を取る限り、最先端の革命理論に合わせた理論変容が不可避だったのである。

少し時間を戻す。二六年一二月の党再建大会の宣言は福本の手によるものであり、その宣言文はこう締めくくられている。

先二既ニ革命ヲ達成シタ一國ヲ除イテハ果敢ナル理論闘争ニヨリ
世界何レノ國ニ於ケルヨリモ尖鋭ナル意識ヲ獲得シタル我党ハコ
ノ闘争ノ任務ニ耐ヘ得ルデアラウ。⁽⁴⁹⁾

「革命を達成した」ソヴィエト・ロシアに次ぐ意識性を獲得した、というこの言説、そしてコミンテルン代表のヤンソンの反対を押し切って再建大会を強行した党幹部のスタンスの背景に「日本の運動が

自分たちの縄張りであること」を主張する「一種のナショナリズム」があったと伊藤晃は述べている。⁽⁵⁰⁾

日本の左翼運動にそこまでの自信を与えたのは確かに福本の理論であるが、同時に「革命を達成した」国こそが最も「尖鋭なる意識」を獲得していること、そしてその尖鋭なる意識によって、党運動、ひいては自身の構築した日本の左翼運動理論が担保されているという意識の表れをこそ読みとるべきではないかと筆者は考える。

この点に関して、むしろ問題なのは「ブハーリンなんか福本さんがいっぺんにやつつけちゃう」⁽⁵¹⁾という言説に見られるような、福本理論の担保状況に無自覚な左翼運動家のあり方なのである。自身で理論を構築できないこうしたタイプの活動家たちは、コミンテルンの福本批判に同調し手のひらを容易に返せる他律的な人々なのである。彼らは権威担保された理論を無批判で受け入れながら、理論を構築する人間に時に着き、時に離れ、という行動を無自覚なまま平気でやってしまう。⁽⁵²⁾ 権威担保を前提とした理論受容は、誰よりも「尖鋭なる意識」を得ながら、その実誰よりも「鈍感なる意識」を持つ運動者を大量に生み出す結果を齎していたのである。

つまるところテーゼを「受け入れた」ことが問題なのではなく、「受け入れる」ことを必然とするような権威意識が日本の党中央にこの時期に醸成されていたこと、そしてそれを余儀なくしてしまった他律的な権威への無条件の追従に基づいた運動のあり方こそが、二七年テーゼ受容に関しては問題視されるべきなのである。

加えてここで重要な点をもう一つ挙げるとすれば、日本の運動の権威を担保する社会主義理論の中心が、二七年テーゼの受容によって、これまでのドイツを中心とするヨーロッパから完全にロシアへ移った

ことである。これによりマルクス・レーニン主義理論の最先端がロシアにあるという事実が半ば公然化状態となり、ロシアで生み出された革命理論の積極的な移入が始まっていく。スターリン文献の翻訳が始まった時期からロシア志向は見られ始めていたが、この時期以後、ソ連共産党の党大会の討議や、ロシア作家同盟の会議の訳出などを始めとする生の言説や、ロシアの理論家・作家の著作の訳出が本格化し、広く読まれるようになっていく。そのような状況の中で日本の左翼文芸の世界に登場したのが蔵原惟人である。

蔵原について述べるに際し、テーゼ訳文の公開状況を整理してみる。テーゼ決議が二七年七月一五日で、ソ連共産党機関誌『プラウダ』にテーゼの梗概が記事として掲載されるのが八月一九日になる。

テーゼの内容を日本でいち早く公開したのは、プロレタリア文芸雑誌『文芸戦線』である。同誌二七年一〇月号に掲載された「コミンテルンに於ける日本無産階級運動の批判」がそれで、訳者は蔵原惟人、前述のプラウダ記事の訳である。ちなみにテーゼ本文が掲載された雑誌『インプレコール』⁽⁵⁴⁾が日本に到達し、それを元にした訳文が出るのは二八年二月、掲載誌は中間派無産政党であった日本労働党寄りの雑誌『社会思想』である。⁽⁵⁵⁾『マルクス主義』誌上にテーゼが載るのは二八年三月のことで、党運動に近い人間からテーゼに関する発言はこれ以降になるまでは見られない。

蔵原訳文に反応する形で書かれた『マルクス主義』誌上の最初の文章は二八年一月号の渡辺政之輔「一般戦略の決定的重要点について」である。その文中では「全世界の労働階級の前に最も権威あるコミンテルンが何事を決定したか、今私の直接関するところではない。⁽⁵⁶⁾」という留保を付けた上で、山川均に近い雑誌『労農』(二七年一二

月創刊)の面々が訳文を元に一方的な主張⁽⁵⁷⁾をしていることを批判し、コミンテルン決定はそれを受け取った人々の手で正しい形で明らかにされるだろうと述べている。

渡辺は中央委員としてモスクワに行き、二七年テーゼの作成に立ち会い、それを持ち帰った一人である。また渡辺らの留守を預かっていた中央メンバーの一人佐野学は二七年九月に大倉旭(タス通信勤務)からプラウダの訳文を見せられ、同じく中央部の市川正一に党運動の自己批判についての提案をしたと予審問調書で語っている。⁽⁵⁸⁾さらに同じく中央部の志賀義雄は蔵原訳文に対しコミンテルン批判は事実だろうとおおむね認めながら、「逆宣伝に乗せられず」「党活動を休止することなく展開」するよう全党員に発表したと予審問調書で語っている。⁽⁵⁹⁾蔵原訳文に重きを置かないという態度は、当時の党中央委員候補だった春日次郎も同様で、「あんなものは信用できない。いまに党の方から正式な訳を出すから、あれは読むな」と周囲に言いくるめていたことを、後年の回想で笑いを交えながら語っている。⁽⁶⁰⁾

佐野・志賀の供述は党運動史の披歴という公判闘争戦術の延長線にあり、福本主義もコミンテルン裁定の前段階、すなわち留守中央部の統一戦線の運動展開の実践過程で既に克服・清算されたという一種の進歩史観的回顧⁽⁶¹⁾であり、党運動の無謬性の「文献的」証明⁽⁶²⁾でしかない。故にテーゼ当時の反応としては不適切かもしれない。確かに言い切れるのは、コミンテルンの決定を知る人間がいたにも関わらず、『マルクス主義』にテーゼ全文訳が出るまで、党関係者は合法出版面において沈黙状態を続けたということである。

この沈黙は、テーゼを日本の共産主義運動全般に対するコミンテルンからの批判と取る労農派系の考えだと、都合の悪い状況への沈黙と

いう問題になる。しかしながら、テーゼを「日本共産党の綱領・行動指針」と取る党としては、一月に党中央が持ち帰り、内部討議を経て政治テーゼ等を作り、党員に伝達、運動の再編を図ると言う過程の中で内部的に処理すれば何の問題もないのである。テーゼ公開はいずれ行うとしても、党が本格的に活動を開始して以後、福本的誤謬の克服の表明と、労農派の無視した山川的解党主義への批判を展開しさえすればよいということになる。党と労農派系の間でそもそもテーゼの本質認識が異なっていたのである。

この両者の差異にはコミンテルンという組織を旧来の社会主義者の合議体組織のような開かれた存在という捉え方を依然持ち続けている労農派系と、支部加盟申請や綱領審査といった手続きなどの経験からコミンテルンを系統立った運動組織機関として捉えている日本共産党側との認識の違いも大きな影響を与えているであろう。

そして、党外でなされた言説を不確かなデマとして切り捨て、党の公式の発表までは既定路線を墨守するという、テーゼへの反応に見られるこのスタンスは、間違いなく「前衛党原則」に基づいた反応であり、二七年のこの時点で明らかに日本共産党に属する人間は前衛党原則に基づいた行動原理で動いていることが明らかになる。少なくとも共産党中央に近い運動者たちは、はっきりと行動で二〇年代前半の運動者と違う、「党生活者」化したことを示したのである。

また、技術的な面でテーゼ受容に関して考えてみると、日本の党関係者の中にこの時点でロシア語の素養を持ち、生硬な政治的文章の訳出を定期的になさる人材がいなかったという問題が浮上してくる。そう考えてみると、テーゼに関する沈黙は日本の党がドイツ知からロシア知への変化に対応していく準備が整っていなかった証拠でもある

う。福本主義綱領が受け入れられると考えると党中央を挙げてロシアに向かい、全否定の上新綱領を与えられるということすら彼らにとつては青天の霹靂だったのだから、当然ロシア関連の「知」に対応するシステムが出来ていようはずもない。

ロシア語の才能を持つ人間や、通信社の関係者、そして何よりクルトベ帰りの留学生が党において重要視されたのは、こうしたロシア理論への対応システムの要としての役割を期待されたからという部分も大きいのではないだろうか。

この局面で日本の左翼論壇に登場した蔵原惟人は、東京外語大でロシア語を専攻し、ロシア文学の雑誌を在学中に刊行するなどロシア語・ロシア文学に親しんだ後、『都新聞』特派員として二五年二月から二六年一月までロシアに滞在、現地の実態・文化を目の当たりにして帰って来た⁽⁶³⁾という、知識・経験いずれにおいても当時の日本の運動局面において飛び抜けたロシアとの親和性を持っていた。まさに「余人をもって代え難い」存在だったのである。

テーゼ翻訳以後、その線に沿った文化運動の分裂・統一の流れの中で蔵原はその権威を確立させていった。プロレタリア・リアリズムの問題、芸術大衆化論争、芸術価値論争、形式主義論争など一九二八年から一九三〇（昭和五）年前半にかけてのプロレタリア文芸理論の局面で常に運動をリードした蔵原は、ルナチャルスキーの文芸理論やフアジェーエフ『壊滅』の翻訳などを始めとするロシア知の移入の面でも日本の文芸運動に大きな影響を与えて行く。

針生一郎は蔵原を「本質的にはソヴェト理論の恣意的な祖述者」と位置付け、情勢の急速な展開に引きずられ、理論的座標が絶えず変転する点をマイナス面として指摘している。⁽⁶⁵⁾プレハーノフの二元論、プ

ハーリンの唯物論的観点、ルナチャルスキーの同伴者作家論など、ロシア理論要素を短期間に次々と自論文の補強要素として組込み、理論を牽引した蔵原の姿は、都合のよい祖述と理論的土台の流動性の現れとも取れ、針生の指摘はある種正しくもある。

だが、逆に考えてみれば、恣意的な祖述とはロシア理論をただ垂れ流すのではなく、情勢に応じた引用が出来るということに他ならないのではないだろうか。二七年テーゼ以降の左翼運動においては現実の情勢には一時的に適合したが、権威の担保に依存する形で原則論に固執し、情勢の変化の前に力を失った福本という前例が明確に意識されているはずである。

そうした中、蔵原は情勢に合わせた理論を「選び取る」スタイルを確立し、それにより自身の権威の延命を図り得た、と考えられないだろうか。つまり蔵原は外国の運動理論を自身の権威担保に利用するに当たって、自身のロシア知を生かして時々の主流理論援用の選択を行い、情勢の変化に応じて理論を「取捨選択」するやり方を確立するに至ったということである。この点を考えても、福本と蔵原は理論局面において、「プレ蔵原としての福本・ポスト福本としての蔵原」という形で連続して捉えられるべきであろう。

その後一九二九（昭和四）年に当時の党中央委員田中清玄との接触を契機に、文化人として始めての黨員となった蔵原は地下に潜り、翌三〇年六月プロフィンテルン（国際赤色労働組合）第五回大会に出席する指令を受け日本を離れる。こうした状況に伴い、理論の取捨選択が出来なくなった文化運動では混乱と停滞が齎され、それが解消されるのは蔵原帰国後の三一年を待たねばならないが、この点に関しては本論文の趣旨と外れるため、多言は避けることにする。

おわりに

ロシア革命直後、日本ではすぐに革命理論がロシアのものに変わったわけではなかった。革命ロシアに関する情報収集が困難で、現状が伝わるのに時間がかかったこと、当時の運動の主流がアナキズムであったことなどに理由を見出すことは出来るが、大きな理由として、ソヴィエト・ロシア及びコミンテルンが世界革命における唯一前衛だという認識が日本の左翼運動者を貫くものではなかったということが挙げられるであろう。

山川均ら、これまでのインターナショナルを知る人々にとつて、革命運動組織体は各国独自に存在するものであり、インターナショナルはその連合体・合議体に過ぎず、規律によって貫かれた一枚岩の党的組織というコミンテルンによる統制は彼らにとつては無条件に理解・承服できるようなものではなかった。⁶⁷

そうした意識は日本にレーニン文献が伝わってくるにつれて次第に変化し、コミンテルン及びソヴィエト・ロシアが、あるべき唯一前衛党の姿として認識されるようになっていく。革命の成功と言うだけで無条件に、無自覚に曖昧な権威が意識される時代、すなわち素朴な革命賛美の時代から、理論的に権威が補強される時代へと移り変わりつつあったのである。

そして時を同じくして日本の左翼論壇に彗星の如く現れた福本和夫が、自らの理論を担保する存在として、明確な出典を付した形でレーニンの引用を始める。成功した革命の体現者であるレーニンによって担保された福本の理論は一躍運動の中軸理論として定着し、日本の運

動において起こった組合組織の分裂という現実の変化がその理論を裏づける形となり、福本を後押ししていった。

また福本理論はこれまでの左翼運動にはなかった強い目的意識性・指向性を運動に持ち込み、成功した革命とその指導者を模範とする形での自己修煉による職業革命家性の体得を運動参加者に促した。その結果日本の左翼運動家は革命を「見守る」伝道者から革命を「導く」理論注入者へとその性質を変化させていった。

しかし福本の権威確立の段階では、まだ日本の左翼運動内における運動の「知」はロシアとドイツが拮抗する形を保ち得ていた。福本自身レーニンだけでなく、留学先で直接大きな影響を受けたルカーチヤ・コルシユといったドイツ社会主義系学者の理論を援用したし、当時の左翼雑誌でもドイツ社会主義系学者（ウエルナー・ゾンバルトやヘルマン・ゴルテルら）の引用が多様に見られる。こうした状況が徐々に変化を見せ始めるのが、福本が党運動の中軸に据えられた二六年から翌二七年にかけてである。

その下地はスターリン理論の到来という形で訪れた。レーニン理論をより端的に示した現役の党最高指導者によるレーニン解釈の到来は、福本理論の浸透過程でロシア理論指導者による権威の担保が重要な意味を持つようになっていた日本の運動理論界において、絶大な権威を持つものとして受容されるのは不可避であった。事ここに至り、福本・レーニン・スターリンの三者による理論担保構造が確立する過程で、日本左翼運動の主導理論が、「マルクス主義」とその分化思想群ではなく、「マルクス・レーニン主義」ただ一つへと決定的に変容するという思想史上の一大転機をも迎えることとなるのである。

その前提の下、コミンテルンからの二七年テーゼが日本に齎される。

一般大衆の眼の届かないロシアにおいては、他ならぬ福本自身がスターリン、そしてコミンテルンの前で自己批判をし、日本共産党がコミンテルンへ名実共に理論的に従属するという構図が作り出された。そして党中央部が帰国する直前、二七年テーゼの梗概を初めて日本に伝えたのが文芸家蔵原惟人である。彼の登場は日本の運動理論の合法局面において新たな、そして決定的な変化を齎す。

スターリンの到来によってそれまで拮抗していたドイツ知とロシア知の競合関係の潮目が変わりつつあったこの時期、初めて「公表」されたテーゼである二七年テーゼは、コミンテルンの権威を一般運動大衆にも明確化すると共に、革命運動理論におけるドイツ知からロシア知への主要理論の転換を決定づけるものであった。そしてその変化に大きく貢献した蔵原惟人は、ロシア語を読み、解し、訳す能力に秀で、ロシア知主流の時代にとって欠くことのできない存在として、強い権威を獲得していくことになる。この傾向は二七年テーゼに対する反応の遅れにも見られるように、党運動中軸にロシア知を持つ逸材がいなかったことによっても拍車が掛けられていく。

二八年以後、地下に潜った党は理論上の自主性を喪失し、コミンテルンに従属する存在として活動を展開することになるが、その原因の一つがロシア知主流の時代に対応できる存在を欠いたことである。後に党にはクートベ帰りの留学生在が送り込まれ、党再建の局面を度々担っていくが、彼らはロシア語を読み、訳すことは出来ても日本の状況と照らし合わせて解釈し、応用することが出来なかった。彼らもまた、誰よりも「尖鋭なる意識」を得ながら、その実誰よりも「鈍感なる意識」を持つ他律的な運動者だったのである。

それに対し、文化運動の局面においては、蔵原惟人というロシア知

の第一人者を擁し、状況の変化に応じた最先端のロシア運動理論を選び取り、訳し、日本の運動に適用するための論争を行いながら運動を発展させていくという形で、少なくとも蔵原が活発に活動出来た時期においては合法局面での運動を活発化させることが出来た。

以上見てきた日本の運動理論における流れは合法左翼出版物を通して多くの人々の眼に触れ、左翼運動に対して比較的同調的な傾向を持つ人々は、それによりソヴィエト・ロシアとコミンテルンを頂点とする革命運動及びその理論を権威として受け入れていく。この流れの中心に位置し、日本の合法局面で強い理論的影響力を保った福本・蔵原の二人は共に、当時最先端の理論を元の言葉で読み、解し、現地で活動する中で知を蓄え、それを元にした著述で権威を得ると同じ道を辿った、連続性を持つ存在だったのである。

外来理論による権威構造の構築、文化運動領域がその権威構造を継承・発展させる（後にそれは政治領域にフィードバックされる）という、日本の左翼運動権威確立における特徴はこうして一九二〇年代の運動変容過程を通して形成されていったと言えるだろう。

註

- (1) 筆者の研究のスタンスを示す論文として、「昭和初期プロレタリア文化運動の組織化に伴う運動権威の形成」〔東京大学日本史学研究室紀要〕15号（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 日本史学研究室 二〇一一）がある。該論文の第一章第一節・第二章第二節の一部分を下地として本論文は形成されている。

拙論文は著者の研究の土台となるものであり、「見えない」非合法党への権威をその周辺に位置する大衆団体がいかにして受け

入れ、それによって運動自体にどのような変化が現れるのかをプロレタリア文化運動を中心に考察したものである。

- (2) 竹内洋は筒井清忠の研究を元に、マルクス主義が学生に容易に浸透した理由として、ドイツ古典学・イギリス古典経済学など、さまざまな教養要素を総合したものの、上位教養として捉えられ、学生が「知的覇権をにぎることができるという魅力」があったからであると指摘している（竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』〔日本の近代〕12 中央公論新社 一九九六）二四二頁）。

- (3) 蔵原と福本の理論的接点は後述する雑誌『文芸戦線』に掲載された「北浦氏『アンチ福本イズム』の文献的基礎」〔二七年四月号〕及び「再び北浦氏の誤謬に就いて」〔同年六月号〕だけである。この両文章はいずれも社会主義運動家北浦千太郎が『改造』二七年三月号「アンチ福本イズム」で引用した、レーニン・ブ

- ハーリンの文献の誤訳・文献理解能力を批判する文章であり、蔵原は福本の理論に反対はしながらも、明確な批判は行っていない。
- (4) コミンテルンの次なる革命の第一目標だったドイツは、第一次

大戦の賠償金支払いのため外国為替の獲得に熱心だったことから、書籍輸出を奨励する態度を取った。英米と違って新規輸入業者の取引申込を積極的に受け付けたこともあって、ドイツ（+フランス）からの書籍輸入がこの時期急増した。この傾向はドイツでの超インフレ進行に伴いますます増加の一途を辿り、ドイツ語の共產主義文献が大量に日本を始め海外に流入する原因となった（脇村義太郎『東西書肆街考』〔岩波新書 一九七九〕一七一頁参照）。

- (5) 犬丸義一『第一次共産党史の研究』（青木書店 一九九三）によると日本のレーニン論文の初出は『新社会』一九一七年一〇

月号に同誌主催者の堺利彦が「ロシアの革命」と題し「ロシア革命におけるロシア社会民主労働党の任務について」を訳出したのが最初であったが、当時の日本の社会主義者はレーニン理論の理解が不十分で、一九二〇年頃からソ連・レーニン研究の本格的な研究が始まった時期だと述べられている。

また時期は下るが、『文芸戦線』二四年七月号の山内封介『レーニン』の批評中に、「レーニンの名はずいぶん世に喧伝されてゐる。あれだけの仕事をしたのだからそれは尤もである。しかし、レーニンの科学的研究や、実際戦術が、どれほど日本人に理解されてゐるかは、疑問である。事実、彼の理論的方面の著書のどれ一つも、今のところ訳されてゐないのを見ても、その消息は分る。」(四三頁)との記述があり、レーニンの理論著作翻訳の不十分さが引き続いてることが窺える。

(6) 山川均のソ連関連情報入手については、小山弘健・小山仁示「大正社会主義の思想分化」(『思想』(466)(岩波書店 一九六三))において、片山潜が中心にいた在米日本人社会主義者グループから近藤栄蔵らを通じ山川に文書が送られていたことが述べられている。

同論文には「社会主義研究」二二年四月号「労働露西亞特集号」において山川が「熱っぽいロシアようご論」の段階にまで至る様が述べられているが、後に佐野学はこうしたスタンスを「水曜会流の公式的ロシア革命賛美」(『社会科学』(改造社)二八年二月号「コミンテルンの批判を読む」と称し、福本主義の方が遙かにプロレタリアートの要求に適合していたという主旨の文章を記している。

(7) 『社会主義研究』一九一九年九月号 一五頁。

(8) 同 一九二〇年六月号(二卷合冊(平民文学社 一九二〇)二二二頁)。

(9) 同前 二一七頁。

(10) 同 一九二一年九月号 巻頭言。

(11) 少し時期は下るが、一九二五年一月に日本に齎されたタールハイマー「理論家としてのレーニン」(久留間鮫造訳)という短評では、レーニンはカウツキーらドイツの革命家によって「埋没せられ」「忘却せられ」た「プロレタリア独裁」などの革命理論を「蘇生」「再発見」した人物として高く評価されている(『大原社会問題研究所雑誌』3(1)(4) 一九二五 二五九頁)。

(12) ソヴィエト組織の紹介としては、帝大新人会の機関誌『同胞』一九二〇年一月創刊号「労働露西亞の国家的構造」が『前衛』に先行するが、前衛党原則に関する記述はなく、ポリシエヴィキはソヴィエト内部の一政党だという事実の言及に留まっている。

(13) 同号の堺利彦「精神主義と潔癖」では、アナキスト批判の文脈で、「其のアナキズムの思想にあこがれる余り、現在に於ける経済的・政治的情勢から生ずる必然の経路を無視して、直ちにその理想境の真中に飛躍しようとアセつてゐる者」(三二頁)をレーニンは「インファンチル・ヂスオーダー」(小児病)と述べた、という形でこれ以後左派右派両方からのレッテルとして多用されていく「左翼小児病」という言葉が初めて紹介されている。

ちなみに堺利彦はレーニン「左翼小児病」を初めて翻訳・発刊した一人である(一九二六年一月 無産社パンフレット。二六年九月に同じく希望閣から和田哲二(国崎定河)訳による「左翼

小児病」の単行本が出ている。抄訳という形では茂森唯士「レーニニズム」(改造社パンフレット第二篇 一九二四)が先。

(14) 『前衛』二二年一月号 三二〜四五頁、同二月号 九八〜一〇二頁。

(15) 第一次共産党の結党報告のためロシアに赴いたこともある荒畑寒村は、後年の座談会で二十一箇条承認を求められたことはなかったと述べ、鍋山貞親が社会民衆党との峻別のためヨーロッパでは必要だった原則も、最初から共産党として誕生した日本では不要だったからであろうと補足している(『党創成期の革命家たち』(『運動史研究』9 (三一書房 一九八二) 三六〜三七頁)。

(16) 山川は前述の「ソヴェエツト政治の特質と其批判」でも、「ソヴェエツトの独裁政治とは、畢竟『組織されたる民衆』の独裁政治であり、『組織されたる生産者』の独裁政治を意味するものである」(二巻合冊 一九五頁)と述べ、少数の権力者の専制でなく、あくまで民衆組織による健全な権力構造であることをアピールしている。

またアナキスト系の人々は一九二二年以降の新経済政策(ネット)を革命への裏切りとして批判しており、山川らが中心になつて展開した「ロシア飢饉救済運動」は、ネット批判への回答の一つとして捉えることも出来よう。

(17) このことは、高屋定国「山川均の「方向転換論」に関する一考察」(『キリスト教社会問題研究』2号(同志社大学人文社会研究所 一九五八)などで指摘されている。

(18) 福本和夫『非合法時代の思い出』(インタープレス 一九七七) 三九〜四〇頁。

(19) 『社会思想』二四年七月号 編輯後記。

(20) 『マルクス主義』二五年六月号 復刻版第二卷(法政大学出版局 一九七二) 九七〜九八頁。この論文が北條一雄名義の初出論文であり、福本和夫名義で『経済学・日本の学者批判』を、北條一雄名義で『組織論・運動論』を論じているという形で福本は活動していく。

(21) 同 一〇三〜一〇四頁。

(22) 同 一〇七頁。

(23) 二五年一月にソ連でトロツキーが人民委員を解任され、「左翼反対派」が敗れたことも、『マルクス主義』誌を含め当時の日本にも伝わってきており、「分離」の発現の一例として受け取られたであろう。福本理論の隆盛にはこうした直近の客観的状況変化が理論に適合的であったことも大きく作用している。

(24) 荒畑寒村は前述の座談会で、福本主義が猖獗をきわめた理由について、「孤立するような傾向」に合った左翼が自分たちを理論化する、理論的には認める空気があったからでもある、と述べている(『運動史研究』9 三二頁)。また伊藤晃は、党再建グループの活動家たちが福本の提言にコミンテルンの指示への思想的根拠だけでなく、山川均から離れた政治活動に向かう「不安への明快な解答」を感じさせ、運動に自信を持たせた点を指摘している(伊藤晃『天皇制と社会主義』(勁草書房 一九八八) 二五六頁)。

(25) 『マルクス主義』二五年一〇月号 復刻版第三卷(法政大学出版局 一九七二) 一九頁。

(26) 同 二五年六月号 復刻版第二卷 一〇九頁。

(27) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』(岩波書店 一九九五) 九七頁(『修養主義』に関しては同著第一章参照)。

(28) 『東京帝大新人会研究ノート』一六号（慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会 一九九四）二二頁。

(29) 『寒村自伝』などで語られる明治期の「社会主義伝道行商」などまさにそうした啓蒙・呼びかけの文脈の中から生まれた文化であるし、日本の社会主義のスタート地点の一翼を担っていたキリスト教社会主義の系譜に位置する活動も志向性を持つ「導き」ではなく、「見守り」の形である。

(30) 山川均「或る青年に与ふ」〔『進め』第一巻第三号（進め社 一九二三）四頁。〕

(31) 鍋山貞親は前述の荒畑らとの座談会で、こうした態度を取る山川を「提唱派」と揶揄して呼んでいたことを述べた上で、山川が共産党再建ビューローに参加しなかった理由の一端をそこに求めている（『運動史研究』9 三〇頁）。

(32) 高橋貞樹「国家に関する一断片」〔『マルクス主義』二四年八月号）、フィリップス・プライス・高橋貞樹訳「資本蓄積論」に就いてローザ・ルクセンブルクと「中央派」Ⅱ（同六月号）。

(33) 『マルクス主義』二五年一月号 一七頁。

(34) 『マルクス主義』二五年六月号に掲載された、志賀義雄「科学の日本主義」の理論」、林房雄「日和見主義の誕生」の両論文は共に註と引用出典明記がある論文である。同誌の寄稿者の中でも志賀と林はいずれも東京帝大出身の典型的な知識人層である。彼らにしてみれば「衛学的」という誹りは（是枝恭二も同じく東京帝大の出身なのだが）憚るべきものではなかったであろう。

(35) 林房雄『文学的回想』（新潮社 一九五五）一六〇一七頁。この文章に続けて、福本と比べて自分の無力さを愚痴る林に志賀義

雄が、自分にしかできないことをやるよう勧め、林は文学の道を追求することを決める件がある。後年政治と文学の相克の中でいちはやく「文学への回帰」を主張した林の原動力は、政治家・理論家ではなく文芸家であるという自負にこそあり、それは福本登場によって醸成された意識であることが窺えるであろう。

(36) 単行本化にも大きな問題があり、当時の左翼文献は抄訳の形などで同一文献の別訳が全く別の書籍として出版される例が多々あった（前述した『左翼小児病』の抄訳が『レーニンニズム』という形で出されたのもその一例）ため、タイトルだけではどの文献の訳かわからない状態で海外理論を受容しなければならなかった。

(37) 『マルクス主義』は海外の著作の部分訳・抄訳を早い段階から盛んに掲載していた雑誌で、二四年一月号などは新刊紹介を除けばプーハーリン「ロシアに於ける階級闘争と革命」のみですべての誌面を埋めるほどであった。

(38) 以下引用部は『マルクス主義』二五年一〇月号 復刻版第三巻 三〇八頁。

(39) 石堂清倫『わが異端の昭和史』上（平凡社二〇〇一）九八頁。

(40) 同著の受容に関しては伊藤晃前掲書 三六一―二頁にも詳しい。伊藤は佐野野のレーニン主義解説が、ロシア滞在中に触れ得たジノヴィエフでなくスターリンに依拠した点を取り上げた。「世界のすべてを決定的な公式で説明し、あらゆることに応用できる原理を、西洋思想から探していた人」で、「高い理論として出来上った結論を輸入」する近代日本思想史の伝統を受け継いだ人間であった佐野は、スターリンがその伝統に合致していたからスターリンを選んだのだと伊藤は結論付けている。

- (41) 『東京帝大新人会研究ノート』 一四号 (一九九二) 一〇九頁。
- (42) レーニン著単行本の冊数を見ると、二四年五冊・二五年二冊・二六年十二冊・二七年三十四冊・二八年(四月まで) 十七冊と言う推移をたどる(『前衛』(日本共産党出版部) 一九六〇年七月号「日本で刊行されたレーニンの著作の目録Ⅱ 戦前編」に依拠)。
- (43) 布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』(燕塵社 一九二七) 二九〇頁。布施は東京日日(後大阪毎日) 新聞ロシア特派員として、レーニン・スターリン・トロツキーらと会見。その模様や、ロシア滞在時のルポを纏めた書籍を複数出版している。
- (44) 同前 三六頁。
- (45) 富士辰馬『レーニン線上を歩むソウエト連邦』(平野書房 一九二七) 二頁。著者の富士辰馬は、ブハーリン『史的唯物論』の最初の共訳者としても知られた人物である。
- (46) 『現代史資料』(14) (みずず書房 一九六四) 八四〜九五頁参考。
- (47) 三二年テーゼの日本への伝達ルートに関しては加藤哲郎「政治と情報——旧ソ連秘密文書の場合」(『年報 社会と情報』創刊号(東信堂 一九九六))を始めとするベルリン反帝日本人グループの研究に詳しい。後述の片山潜在がベルリンに資料を送るルートと、二七年一〇月以降日本からドイツに資料が送られて来るルート(二七年一〇月一四日小宮義孝宛国崎定洞書簡(川上武、加藤哲郎、松井担編著『社会衛生学から革命へ』(勁草書房 一九七七) 所収)を参考)の接合点と同グループの中軸にいた国崎定洞であり、東京のソ連大使館ルートが閉鎖されて以降は、専らこのルートが日本とソ連の資料交換の主軸の一つとなる。
- (48) 犬丸義一「日本におけるマルクス主義」(『歴史評論』三九九(校倉書房 一九八三) 二九〜三〇頁)に代表される研究の形。
- (49) 『現代史資料』(14) 六四〜五頁。
- (50) 伊藤晃前掲書 二七五〜六頁。
- (51) 「無産者新聞とその時代」(『運動史研究』3(三一書房 一九七九) 一二九頁。門屋博の談話中、渡辺政之輔の言とされるもの。伊藤前掲書 二五六頁でも引用)。
- (52) 伊藤晃前掲書では、党再建グループに福本理論が受け入れられていくも、それは「権威」としての利用に過ぎず、福本は既存の党運動に関するテーゼなどの情報を見せられない状態で活動するという、他の同志との「相互不信のなかで共存」する状態にあったという点が指摘されている(二五七頁)。
- 再建グループにとって福本は実に都合よく利用され、捨てられたようなものであるが、権威とそれに集う人々によって構築された集団の構成員にとって、ある種自然な状況変化への対応と言えよう。コミンテルンのテーゼを知らないⅡ最先端の理論に対応できないという状態が理論局面で大きなマイナスになるという状況を作り出したのは、レーニンによる理論担保によって権威を獲得した福本その人なのであり、権威足り得なくなった福本をそのままにしておく道理はないという理屈は当然成立し得るのである。
- (53) プロレタリア美術家永田一脩は戦後の回想で、彼が蔵原と外村史朗に誘われ彼らの翻訳がてらの避暑に同行した時のことを述べている(『プロレタリア美術運動の回顧』5—永田一脩氏にきく)『美術運動』一〇四号 日本美術会 一九七七) 七五頁)。その翻訳の合間に書いた絵が、永田の代表作「プラウダを持てる蔵原

惟人」(一九二八)である。时期的に考えて、この時蔵原の手元には二七年テーゼ梗概の載ったプラウダがあり、描かれているプラウダがそれである可能性があるが、推測の域を出ない。

『プラウダ』に関してはこの時期約二ヶ月位の「時差」で日本に齎されていたと推測される(『インタナショナル通信』(産業労働調査所)二六年一月八日号に、一〇月二日の『プラウダ』社説(ジノヴィエフら反対派に関する記事)が掲載されていること、蔵原が二七年七月末の同誌掲載論文(スターリン・ブハーリン)を全訳し一月初頭に単行本化していることなどが根拠)。その日本への伝達ルートに関しては不明確な部分が多い。後述するタス通信の大倉旭が訳文を持っており、ソ連に送る文書の窓口になっていたこと及び、産業労働調査所の岡部隆司・タスの大倉旭がクートベ帰りの留学生在が党と連絡をつける際の手段とされていること(風間丈吉『非常時』共産党』(三一書房 一九七六)七四頁・一三一頁)からソ連・タス通信・産業労働調査所を結ぶルートが文書伝達にも使われていたと考えるのは想像に難くない。もう一つのルートとして二七年頃まで、ソ連大使館を直接介したルートが存在した。ヤンソンが片山潜在新聞や書籍を送り、片山に「ベルリンやパリに送っている資料」を東京のソ連大使館の方に送ってほしいという二五年の書簡が存在する(村田陽一編『資料集 初期日本共産党とコミンテルン』(大月書店 一九九三)三〇頁)。また蔵原惟人が文化関係でロシア大使館に出入りしていたという田中清玄の回想(田中清玄『赤色太平洋記』第三回〔現代〕一九七六年三月号)二二四頁)もあり、合法面にいた頃の蔵原はそこで『プラウダ』も入手していた可能性がある。だが、

『プラウダ』ルートに関してはさらに調査・研究を要する。

(54) 『インタナショナル・プレス・コレスポンデンス』が正式名称。ソ連で発行されていた各国の共産主義運動に関する通信報告雑誌。独・英版が日本には入ってきており、丸善などの洋書店で入手出来た。東大赤門脇にあった洋書店教明社でも取扱われており、新人会員がよく利用していたと関係者の回想で語られている。

(55) 訳者は田中九一。元新人会員で、当時満鉄東亜経済調査局勤務。『社会思想』誌では主に海外の運動情報欄を担当(梅田俊英「社会思想社の一側面(上)」田中九一と帝大新人会OBの動向」『大原社会問題研究所雑誌』479 一九九八)参考。

(56) 『マルクス主義』二八年一月号 復刻版第九卷(法政大学出版局 一九七三)三頁。同号編集後記では、コミンテルン「批判」についての論究が遅れた理由は「完全なる内容を知り、これに対する十分なる攻究をする必要があると考へた」ことと、「理論的批判、意識の転換といふ事のみを以つて始めるべきでなく、現実の政治的任務―労働者大衆の闘争を具体的に進展せしむべき―を遂行するための、あらゆる準備を以つて始めなければならないと信じた」ことの二つだと述べる(二一〇頁)。同誌は不完全な訳を元に議論しないとのスタンスを一貫して維持していた。

(57) 二七年テーゼでは福本主義同様に山川主義も批判の対象であったが、その分量は福本に割かれた部分より少なかった。この件に関し、福本和夫は後年、最初の草案では詳細な山川批判があったが、ブハーリンが、山川派はやがて党を離れるだろうから立ち入った批判の必要はないとの理由で訂正し、極めて簡単なものになったと述べている(『福本和夫著作集』第10巻(こぶし書房

二〇一〇(二九頁)。

- (58) 「佐野学予審問調書」(『現代史資料』(20) (みず書房 一九六八) 二二二頁。昭和二年九月に入党した田中清玄は、入党の査問を受けた際、党中央委員杉浦啓一からロシア語・英語・日本語の三枚紙に書かれた二七年テーゼを見せられたと回想している(『赤色太平記』第二回(『現代』一九七六年二月号) 八七頁。田中が見たものは、佐野が見たテーゼと同じくプラウダからの部分訳であろう(全文掲載は翌年の『インプレコール』を待たねばならない)。田中の回想が正しいとするなら、二七年九月の段階で『プラウダ』はロシアからの直接ルート及び欧米を経由するルートの両方から党中央に齎されていたということになる。

- (59) 「志賀義雄予審問調書」(『志賀義雄選集』1 (五月書房 一九九一) 一八五〜一八六頁)。

- (60) 前掲「党創成期の革命家たち」(『運動史研究』9 二九頁)。

- (61) 志賀義雄は予審問調書の中で、留守中央部の党活動を説明しながら、「福本主義に凝り固まっていた」ならば、テーゼが齎された際にもっと苦心して党活動を転換しなければならず、テーゼに対応できたのは福本主義を克服していたからだとのスタンスを一貫して主張している(志賀前掲書 一九六頁)。

五色温泉党大会で配布された「政治運動方針要旨」には、行動目標として「協同戦線党」の実を備えるに至った労働農民党のイニシアティブで「労農総聯合」結成に向かうことが挙げられ(『現代史資料』(14) 六六〜六七頁)ており、その線に従うならば、「実」としては統一戦線運動を展開したと言い得るだろう。

同文章中には折衷主義の克服によって「今や我々ハ初メテ客観

的状态ノ変化ニ応シテ屈伸自在ナ戦術ヲ以テ問題ヲ解決スル能力ヲ備フルニ至ツタ」という記述(同前 六六頁)がある。この記述を踏まえると、福本主義の克服に繋がるとされる留守中央部の運動も「戦術」の産物であり、共産党の路線が一貫していたことが「文献的に」示され得る。しかしながら、これはあくまで戦術であり、「戦略」の枠の大きな変化に掣肘されない現場の行動に他ならない。これらの記述は、党公式の主張だけでは戦略面や理論面での影響・功罪を見落とすことになるという一例であろう。

- (62) 小田切秀雄は戦後日本共産党の「自主独立」路線に関して、党が過去の文献の片言隻句に遡って同路線が「一貫して」主張されて来たことを「文献的に」立証することで、執行部が一切の責任から解除されるというあり方に強い疑問を呈している(『人間性の時代から―侮蔑の時代と知識人』(『朝日ジャーナル』8 (41) (朝日新聞社 一九六六) 二二頁)。

- 「福本主義」克服に関する党中央のこの態度も本質的には同じであり、無謬性を証明するための種苦心の様が窺える。しかしながら、こうした「文献的」装飾を可能にするには体系づけられた文献の整理と文献情報という「知」の保持がなされていることが必要条件なのであり、そうした行為が左翼運動内で展開されるようになったのは、福本が文献の引用・整理という学術的要素を運動理論構築過程で持ち込んだことが遠因ではなからうか。(63) 蔵原の論壇デビュー前の経歴については蔵原惟人(聞き手 西田勝)「プロレタリア文学運動について」(『文学』三〇巻一二号(岩波書店 一九六二) 七七〜七九頁、また土方正巳『都新聞史』(日本図書センター 一九九一) 三三三〜三三二頁参照)。

(64) 労農芸術家聯盟の再分裂(二七年一月)、先に同組織と袂を分かつていたプロレタリア芸術聯盟(中野重治・鹿地亘ら。福本理論の影響下にあった)と、蔵原・林房雄らを中心に分裂組が組織した前衛芸術家聯盟の合同協議からナツプ結成へという流れは前述の拙論文第二章第二節・第三章第一節参照。

(65) 針生一郎「ソヴェト文芸理論と日本プロレタリア文学―平林・中野・蔵原をめぐって―」(『文学』(47)(9)(岩波書店 一九七九)二二七頁、同「ソヴェト芸術論と蔵原惟人の役割」(『文学』(49)(3)(一九八二)二九頁。初期蔵原のロシア理論の援用に関しては杉浦晋「蔵原惟人論―芸術大衆化論争の歴史に関する一考察」(『稿本近代文学』17(筑波大学文芸・言語学系内平岡研究室 一九九二))も参照。

(66) プレハーノフ引用は「マルクス主義文芸批評の基準」(『文芸戦線』二七年九月号)。プハーリン引用は「生活組織としての芸術と無産階級」(『前衛』二八年四月号)。ルナチャルスキー理論は、二八年五月に始まる「芸術大衆化論争」の蔵原のバックボーンとして機能するなど、蔵原の論文を補強するロシア理論の多様さと状況に応じかつ時を得た理論の使い分けは特徴的である。

(67) 『山川均自伝』(岩波書店 一九六一)の「共産党と労農派の対立点」において、山川はこの見解を説明し、「三〇年後の今日もなんら修正を加える必要がない」と言い切っている(四二九〜四三二頁)。山川は第二インターの国家主義性を批判はするが、第一インターの単一組織性も同時に否定し、第二インター的合同組織体を高く評価している。そうであるが故に、本論文第一節でも触れたように統一戦線戦術を取っていた一九二三年までの時期

(山川自身も中央に名を連ねた第一次共産党の活動時期と近似)のコミンテルンの指導を肯定もしている(関幸夫『山川イズムと福本イズム』(新日本出版社 一九九二)一三一〜一三三頁)。